

8月4日 年間第18主日

コヘ 1:2, 2:21-23 コロ 3:1~11 ルカ 12:13~21

1. ルカ

w.13-14 「群衆の一人が言った。“先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。” イエスはその人に言われた。“だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。”」

先月の聖書の学びの中で私は、“前後関係から切り離された聖書の断片は、それだけでは『神のことは』としては働き得ず、人間の勝手な主張に都合よく利用されることの方が多い”ということをおきました。今朝の福音書の朗読箇所でも、もしあなたが“何かに分かりかけた”ように感じても、続けて新約聖書を読み進めてその全体の視野の下で理解を深めないと、「真の知識に達する」(コロ 3:10)「成熟した人間」(エフェ 4:13)になることは出来ません。

遺産の相続権については我が国では民法によって定められていて、恣意的にこれを曲げることは禁じられています。それは近代市民社会の法であって、宗教法でもなければ教会法でもありません。アウグスチヌスの著書“神の国”以来現代に至るまで、この世には“キリスト教的社会制度”とか“キリスト教的政治機構”“キリスト教的経済構造”などというものは存在し得ないことが自明であるにもかかわらず、しばしば「地上のもの」(コロ 3:2)と“神の国”が混同されて来ました。“先生、…… 言って聞かせてください”と、イエスをこの世の指導者や裁判官のように引きずり出すようなことが、今も身近な所で起こっているのです。

教会には預言者的使命があると称して、これまでも教会の教導職や信徒の団体の名において、しばしば社会的、政治的、経済的発言がなされて来ました。近年の“いままぐ原発の廃止を”なども、その典型の一つです。もしそのような主張の聖書的根拠を探すなら、旧約の預言者、例えばアモスを引き合いに出すことが出来るかも知れません。しかし、新約の使徒たちを根拠にすることは出来ません。なぜなら彼らは、キリストも教会も、この世の事柄の裁判官や調停人などではないと考えていたからです。

使徒たちから受け継いだ教会の預言者的使命とは、この世に向かっては「神と和解させていただきなさい」(II コリ 5:20)と宣教することであり、信者に対しては「上にあるものを求めなさい」(コロ 3:1)と、目標を目指してひたすら走るように教え励ます(フィリ 3:14)ことでもあります。

2. コロ

w.9-10 「古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身につけ、日々新たにされて、真の知識に達するのです。」

「真の知識」とは、一方ではキリスト者の信仰体験に基づくものであって、“キリストと共に葬られ、キリストと共に復活させられたこと”(2:12)、“新しく創造されたこと”(II コリ 5:17、ガラ 6:15)、“そのように考えること”(ロマ 6:11)です。しかし他方では、同時に知的なものであって、これを教会の中で繰り返し語って

“互いに教え合う”(3:16)ことが勧められています。

教会は児童や未信者の成人のためには、伝統的にカテケージス(要理教育)を行って来ました。今年は信仰年でありますから、特に、すでに救いに与っている全信徒に、カトリック教会のカテキズムを学ぶことが勧められていますが、それでは実際にどれぐらいの人々が・・・ 教導職にせよ信徒にせよ・・・ 本当に学び、理解し、日々新たにされて(v.10)いるのでしょうか。

「真の知識」とは、福音の知識のことであって、御子キリストの受肉と死、死者の中からの復活、再臨に関するものです(ロマ 1:2-4)。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(エフェ 1:7) 「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。」(v.3) それは“人に説明出来る”(1ペト 3:15)知識でなければなりません。

3. コハ

v.2 「なんという空しさ、すべては空しい。」

“コハレトの言葉”は、旧約聖書の中で最も後期に成立した文書群に属していて、そこでは知恵が、突然、懐疑的な世界観へと転換しています。この世の事柄に対する神の意志を、人間がすべて理解出来ると考える楽天主義的な知識への反論として、読むのが正しいように思われます。

「上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい」(コロ 3:2)という「真の知識」を大切にすることは、教会にとっては、いくら強調しても強調し足りないのです。ただの無責任な厭世主義としてではなくて、“地上のものに心を引かれる”ことへの反論として読むとき、それは私たちを“滅びに行き着くこと”(フィリ 3:19)から守ってくれるに違いありません。

私たちはこの信仰年に、各自が聖書を学び、カテキズムを学ぶことによって、ヨブのように懺悔し、神に向かって悔い改める者になりたいものです。「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。…… それゆえ、わたしは・・・ 自分を退け、悔い改めます。」(ヨブ 42:2,6)

アーメン、ハレルヤ。

8月11日 年間第19主日

知 18:6～9 ヘブ 11:1-2, 8-19 ルカ 12:32～48

1. ルカ

v.32 「小さな群よ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」

教会は、“この国の地上における芽生えと開始となっている”ということと、“この神の国の将来における完成(到来)を渴望している”という、二つの事実の中間の時代を歩んでいる“キリストの体”であります(教会憲章5, 7)。そこでは「擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい」と勧められています(v.33)。感謝の祭儀で祈る主の祈りは、“み国が来ますように”という終末的な性格を含んでいて、この中間の時代(終わりの時)に固有な祈りなのです(カテキズム2771)

キリスト教の信仰と宣教は、将来における神の国の完成(到来)を前提としてのみ理解出来るものなのですが、すでに初代教会の時代から、「主人の帰りは遅れる」(v.45)「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ」(III ペト 3:4)と言って、終わりの日のことを本気で信じようとしなない人たちがいました(I コリ 15:12)。そのような現実のただ中で、福音書は敢えて強調して、「あなたがたも用意していなさい」(v.40)と語っているのです。

ペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」(v.41)と質問しています。世の中では大衆がしばしば、政府の指導者や企業の管理職の責任を(やたらに)追及しますが、教会でも何か問題があれば常に、教導職の責任を追求するような声が多くの人々の口から発せられます。確かに「多く任された者は、更に多く要求される」(v.48)のです。しかし、忘れないでください。「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」(ヨハ 1:16)のです。私たち信徒一人一人も、ですから、「多く与えられた者は、多く求められる」(v.48)ことから逃れることは出来ません。忠実で賢い(信仰の)管理人(v.42)であることは、各自の自己責任なのです。

2. ヘブ

v.1 「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」

それは「天の故郷」(v.16)「都」(v.10,16)、すなわち神の国のことであって、私たちは「体の贖われること」(ロマ 8:23)「この死ぬべきものが死なないものを着るとき」(I コリ 15:54)「キリストと共に栄光に包まれて現れる日」(コロ 3:4)を“待ち望み、確認する”のです。

キリスト教は根本的に“旅人の宗教”であるということが、すでに久しく忘れられて来ました。今日伝統的な欧米から、キリスト教が第三世界へとその中心を移しつつあります。そしてますます、キリスト教はこの世のための宗教、つまり社会的、政治的実践を主眼とする傾向が、加速されて来ています。

しかし本来キリスト教の信仰は、「自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者である」(v.13)ということ、「わたしたちの本国は天にあります」(フィリ3:20)というものであることを、私たちは再認識しなければなりません。自らが信仰によって“光”になることが大切なのであって、この世が“暗闇”であることを非難したり、ましてや改革出来るなどと夢想するのがキリスト教の使命であると、安易に考えるべきではないのです(エフェ5:8-14 参照)。神の国を待ち望み、その到来を確信する「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。」(11:6) あと三ヶ月半を残すところまで来た“信仰年”が、主のあわれみによって、カトリックの子らにとって意義あるものとなりますように。

3. 知

v.6 「彼らはあなたの約束を知って、それを信じていたので……」

あの過越の夜の出来事(出12章)の伝承は、その後の歴史の各時代に、繰り返しイスラエルの民の信仰を励ますために語られました。イスラエルは、“神の約束を信じる”ことによって、神の民であり続けたのです。そして教会は、この“神の約束を信じる信仰”を、イエス・キリストに結ばれて(ロマ6:11)、受け継ぎました。「神の約束は、ことごとくこの方において“然り”となったからです。」(II コリ1:20)

「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。」(マコ8:36)

「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロ3:3-4)

この“聖書の学び”が、主の羊たちが御言葉によって命を受けるために用いられますように。

アーメン、ハレルヤ。

8月18日 年間第20主日

エシ 38:4～1027 ヘブ 12:1～4 ルカ 12:49～53

1. ルカ

v.49 「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」

聖書では“火”は、多くの場合神の終末における審判を指して使われていますが(3:16-17、1コリ3:13)、ここでは恐らくw.51-53に言われている“分裂”のことであろうと思われます。

今日イスラム教において、シーア派とスンニ派が激しく対立していることは、よく知られています。同様にキリスト教においても、過去に起こったカトリックからのプロテスタントの分裂が、対立の歴史を今に至るまで展開し続けています。ローマという中心を捨てたプロテスタントは、その後さらに無数の教派に分裂しましたが、カトリックは現代に至るまで、組織としては一つにまとまった教会として存在しています。しかし、それは単に外見上の形のことであって、その実態は多様な諸勢力の寄せ集めであって、半ば揶揄して、半ば好意的に、“カトリックは懐が深い”と言われています。

ルカはここでは“分裂”の積極的な面に注目して、v.49のイエスの言葉をこの福音書に採用しました。もしかしたらそれは、現状の教会に対する 黙 3:16の警告と同じ危機感を、ルカが感じていたからかも知れません。「熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」

v.50 「しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。」

“自らその身にわたしたちの罪を担い”(1ペト 2:24)、“罪を償う供え物となって”(ロマ 3:25)、“十字架の死を耐え忍ぶ”(ヘブ 12:2)のために、主イエスがどれほど苦しまれたか(ヘブ 5:7)を、私たちが深く信仰的に受け止めることは、決して容易ではありません。しかし私たちに救いを与える福音は、この“十字架につけられたキリスト”(1コリ 1:23)、すなわち“御子に関するもの”(ロマ 1:3)です。この“生きており、力を発揮し、どんな諸刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通す神のことば”(ヘブ 4:12)を学ぶために、どんな代価を支払うべきであるかを(マコ 8:37)真面目に考えましょう。

私たちは救われたからと言っても、それで自らの罪への報いである死を避けて通ることが出来るようになったわけでは、決してありません。しかし、その死を越えて勝利を賜るイエス・キリストを、そして復活と永遠の命の賜物を信じているのです(ロマ 6:23、1コリ 15:50-58)。

2. ヘブ

w.1-2 「こういうわけで、わたしたちもまた、……自分に定められている(人生の)競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」

教会に所属している多くの人々が、キリスト教信仰というものを、イエスに見習って自分が清く正しい人

間、そしてイエスのような愛の人になること・・・だと考えています。あるいはまたその目的は、イエスの教えを手本にして、平和で正しい世界を達成することだと理解しています。それらはみな素晴らしいことであり、美しいことであるに違いありません。しかし、“信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめて生きる”とは、そういうことではないのです。

「キリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き」(10:12)、「二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」(9:28) 私たちは自分の人生の主人ではなく(ルカ 12:25-26)、またこの世界と歴史の支配者でもありません。そうではなくて、私たちはキリストのもの(1コリ3:23)、この世界の統治者は神であります(黙 11:15)。

「イエスを見つめながら」とは、キリストの血によって贖われ(エフェ 1:7)、キリストに買い取られた者として(1コリ 6:19-20)、秘められた計画(エフェ 1:9, 3:3)、すなわち神の栄光に与る希望(ロマ 5:2)に生きることを指しているのです。そのために私たち一人一人は、自ら聖書を学び、自分で福音を理解し、自ら弁明できるように備える(1ペト 3:15)ことが大切です。ただの善人や愛の人になることで責任を回避しようとするような、そんな罪と戦うために(v.4)、もしかしたら、主は火を投じておられるのかも知れません(ルカ 12:49)。

3. エレ

エレミヤの預言は、最後の最後までイスラエルの民に受け入れられませんでした。背信の子(3:14)である民の歴史を、彼はいささかも変えることが出来ませんでした。「ありとあらゆるひどいこと」(v.9)をされて、エレミヤは監視の庭に留めて置かれました(38:13)。

しかしエルサレムが陥落し、民がバビロンに捕囚となった後になって、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知ったのでした。彼に続く捕囚の時代の預言者エゼキエルの場合も、同様であったことを私たちは知っています(エゼ 2:5)。そのように、現代の教会でも多くの人々が本気で“神のことば”を聞こうとはせず、それゆえに“福音の宣教”ではなくて“カトリック勢力圏の拡張”という図式で、プロパガンダが進められているような傾向が見られます。

しかし……、「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、始めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17) 「恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。」(フィリ 2:12) 「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」(ヨハ 20:27) 神に感謝!

アーメン、ハレルヤ。

8月25日 年間第21主日

イザ 66:18～21 ヘブ 12:5～13 ルカ 13:22～30

1. ルカ

v.24 「狭い戸口から入るように努めなさい。言うておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」

伝えられた福音を受け入れ(ロマ 6:17)、キリストの血によって贖われ、罪を赦されて(エフェ 1:7)、永遠の命を手に入れるために(IIテモ 6:12)、どんな代価をも払おうと(マコ 8:37)して歩むことは、私たちキリスト者にとって大きな喜びであります。

しかし復活のイエスによる宣教命令、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マコ 16:15)を、きつと終わりの日までにすべての人々が福音によって救われるのだと、安易に考えるべきではないことを、聖書は警告しています。「言うておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」「それを見出す者は少ない。」(マタ 7:14) イエスは、神の国の福音を本当に理解して救われる人が、決して多くはないことを承知しておられました。現代の教会は、イエスと使徒たちが繰り返し語っているこの警告を、心を開いてもう一度聖書から聞かなければなりません。

カトリック信者であるということが、福音と信仰の問題としては捉えられず、ただ教会の行事や活動に参加して皆と仲良くなり、神父や修道者とも仲良くなることで置き換えられてしまっているのです。「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」(v.26)といくら言っても、実際には福音の理解と信仰のためには、自分のためにも教会のためにも「少しも働かず、余計なことをしている」(IIテサ 3:11)に過ぎない、そんな信者が初代教会にもいました。

私のインターネットサイト「聖書の学び」の閲覧者の中にも、実際には各主日の“学び”はほとんど読もしないで、“御言葉によって命を受けるため”という目的とは何の関係もない“無駄話”のために、メールして来る人が時々います。そんな人に限って、まさか終わりの日に裁き主である主イエスの口から、「お前たちがどこの者か知らない」(v.27)と言われることがあるなどとは、思ってもいません。

「狭い戸口から入る」ということを、単なる人生訓としてではなくて、聖書が語っている意味で正しく理解しようではありませんか。いつ福音に目覚め、本気で学び始め、信じるようになるかによって、「後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある」(v.30)のです。

2. ヘブ

v.5 「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。」

霊の父(12:10)である主の鍛錬を、世間における一般的な指導者による鍛錬と混同しないように、用心しなければなりません。

カトリックの歴史においては、修道院や神学院における鍛錬が思い起こされます。プロテスタントでは、

特にカルヴィン派の教会で、教会訓練(discipline)が重視されて来ました。その本来の目的は、福音と信仰のための鍛錬であって、“神のことば”を聞くことを通して“主の鍛錬”を受けることであつたはずなのに、しばしば人間が案出した規則や定め、生活様式や作法などを遵守することに置き換えられる過ちが絶えませんでした。

教導職に対しては、信者の福音的信仰的鍛錬のために、良い指導が期待されています。しかし信者各自は、自分たちを鍛錬してくれるのは教導職ではなくて、聖伝と聖書を通して語られる神御自身であることを、しっかりと弁えていなければなりません。自ら進んで主の鍛錬を受けることを、軽んじてはならないのです。

3. イザ

v.18 「彼らは来て、わたしの栄光を見る。」

v.19 「彼らはわたしの栄光を国々に伝える。」

キリスト教はかつての“外国伝道”によって、欧米から東洋へとその勢力圏を広げました。現代においてはキリスト教は、日本と中国を除く第三世界に重点を移しつつあります。しかし、私たちにせよ彼らにせよ、“神が御子によって語られた”(ヘブ 1:2) “キリストの福音の栄光”(II コリ 4:3-6) を見ているだろうか、真剣に反省してみる必要があるのです。

今朝の第一朗読のテキストは、66:15～24 という区切りの中の一部なのですが、それが 66:16 と 66:24 という審判の告知に前後を囲まれていることを、指摘しなければなりません。

人々が福音の何たるかを理解せず、「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰」(使 20:21)を証しするという、「狭い戸口から入る」(ルカ 13:24)ことを忘れてはいはしないだろうか、天上のキリストは今朝の朗読聖書を通して、私たち一人一人に問いかけておられるのです。

アーメン、ハレルヤ。